慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中級の語彙指導の試み：新聞講読科目の例を通じて
Sub Title	
Author	加藤, 奈津子(Kato, Natsuko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2017
Jtitle	日本語と日本語教育 No.45 (2017. 3) ,p.19- 41
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20170300-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』45：19–41（2017.3）

中級の語彙指導の試み

―新聞講読科目の例を通じて―

加　藤　奈津子

1.　はじめに

本稿は『日本語と日本語教育 44 号』（慶応義塾大学日本語・日本文化センター）での授業報告に続き、中級の新聞講読科目での授業の試みを報告するものである。前回の授業報告は慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター　日本語研修課程設置科目である「新聞講読 5」での授業内容に基づくものであり、その「おわりに―感想として」において結論として次の 2 点を挙げた。一つ目は中級の読解において文脈に沿った因果関係の把握が必要であるという点で、二つ目は読解力を支えるためには語彙力が必要であるという点であった。また、一つ目の点については文章を構造から捉える読解方法が有効であることが分かったとした。しかし、二つ目の語彙力の向上を図る指導方法については検討の余地を残していた。そこで、前回の報告内容の授業が行われた 2015 年度春・秋学期の翌年度である 2016 年度の春学期において、語彙学習指導の効果を挙げることを目的に授業内容に変更を加えることを試みた。

本稿では語彙学習指導の試みを 2016 年度春学期の授業を例に報告する。次章以下で授業の目標設定と具体的な授業方法を記述し、その後、授業の進め方が語彙の理解・拡大・定着に効果があったかどうかを、学習者の様子を中心に報告する。

2.　授業の枠組み

本稿は慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター　日本語研修課程に設置された講読科目「新聞講読 5」において、2016 年度春学期に行った授業の内容に基づいたものである。

3.　2016 年度春学期「新聞講読 5」での指導方法

2015 年度春・秋学期の授業を通じて、読解の指導において文章構造の説明をすることが読解力向上に効果があったとの結論を得た。そのため、読解指導面では 2016 年度春学期にも同様の指導方法をとったため、授業の進め方に変更はなく、同学期においては語彙の指導方法の面のみで変更を試みた。この章では語彙学習指導における目標設定について説明し、具体的な授業の運営については次章で述べる。

3-1　語彙指導の目標設定

2016 年度春学期においては漢字語彙を中心に中級の文章講読に必要な語彙を増やし、定着を図ることを目標とした。漢字語彙を中心とした理由は次の通りである。

初級から中級へ学習段階が移行する際に、学習者に求められるものとして書き言葉的な日本語の運用力の向上が挙げられる。会話の授業や教室での教師とのやり取り以外では、書き言葉的な日本語の使用が多くなるため、それに伴い漢字語彙の使用も増加する。また、中級で学ぶ文型でも漢字語彙の使用が欠かせないものが増えてくるため、文法の説明と並行して漢字語彙を導入することがある。このように理解と定着を求められる漢字が増えることは、特に非漢字圏の学習者にとり負担が大きいと言えよう。一方、漢字圏の学習者であっても中級の文章では読み替え漢字が増えるため、意味を理解していて書き方も分かるものの読み方が不正確であるということが見られる。そして、どちらの学習者にとっても文章中で正しく使

えるようになるには繰り返しの練習が必要である。こうしたことから、語彙の指導は漢字語彙を中心とすることが重要であり、かつ漢字語彙力の向上は読解力の向上に効果的であると考え、新聞講読の授業の目標の一つに設定した。

4. 授業の運営

漢字語彙力の向上を読解力の向上につなげるために、「理解」「拡大」「定着」を軸に授業を運営した。漢字そのものだけでなく漢字語彙の意味も「理解」してから、その語彙の数を「拡大」し、最終的に「定着」させることにより一人で読む力をつけることを目標とした。漢字語彙の理解・拡大・定着を促す目的で、①「学期を通じたテーマの設定」②「単語リストの導入」③「授業での語彙指導の工夫」を 3 つの柱とした。この 3 つの柱が相互に補完し合うことで学習効果が上がることを想定した。

以下、漢字語彙の理解・拡大・定着を促す 3 つの柱ごとに、具体的な語彙学習指導の工夫の試みについて述べる。

4-1 ①「テーマの設定」

2015 年度春・秋学期の授業では数本の記事を提出した際に一つのテーマを設定して、両学期ともに「働く」をキーワードに、関連記事を連続して読んだ。その結果、語彙が背景知識となり、読解力を助けることが分かった。2016 年度春学期においては、更に学期全体を通じたテーマを設定し、テーマの関連性が語彙の理解・拡大・定着に与える効果を狙った。

2016 年度春学期で扱う記事を検討した際、一般紙・経済紙ともに日本内外の「変化」に注目していることを感じた。そこで、外国人学習者が日本国内での日常生活で見る身近な例から社会や働き方の変化が分かる記事を扱うことにした。消費者として接するサービスとその背景にある働き方から具体的に感じてもらいたいと考え、学期を通じたテーマを「サービス」

とした。

同じ分野の記事には内容の重なりがあるので、語彙の重なり率が上がったり、同じ漢字が何度も入っていたりするため、語彙の理解の時間が短縮される上に、語彙拡大にもつながると考えた。また、複数の記事にまたがって出てくることで何回もふれるので、定着も促すのではないかと思われた。漢字語彙に限らず、似た意味の単語が複数回登場するので、語彙全体を増やすことも期待した。

テーマの設定と漢字語彙の指導をどのように関連付けたかについては5章で記事を例に具体的に説明する。

4-2　②「単語リストの導入」

2016年度春学期は前学期は行っていた記事の前渡しを止め、それに代わるものとして単語リストの作業を予習として課した。リストは漢字の読み方を調べ、その単語を使った短文を作成するという内容である。授業後に提出させ、評価の対象とした。単語リストの導入は抽象的な単語などについて授業での導入時間を短縮する狙いもあったが、自分で調べた意味と記事で使われている意味との重なりやずれの確認をすることが理解を促すと考えた。また、拡大と定着についても、テーマ設定によって複数の記事のリストに同じ漢字や似た意味の単語が登場するので、複数回触れることで語彙の拡大と定着を促すことができると考えた。短文作成によって自分で使ってみることで語彙の定着につなげることも意図した。

また、学習者の予習と語彙力の関係、つまり授業に来て初見の記事中の語彙をどの程度読めて理解できるのかということと、導入から時間がたった後でどれぐらい覚えているのかという定着度の2点を見ることも導入目的の一つであった。後者については、既出の漢字が入った単語が後の回のリストに登場した際に、どのように短文で使用していたかを観察した。

単語を調べることで理解と拡大と定着が期待できることはもちろんだ

が、ある分野の記事で頻出する語彙の特徴を把握することを習慣づけることも期待した。この習慣が身に着くと類推力が向上し、知っている漢字や語彙を利用して初見の記事の分野を特定したり、ある程度内容を理解したりすることができるようになると考えたためである。予習で単語リストの作業をして、授業で自分の想定と実際の記事とのずれを修正することによって、学習者自身が初めて見る語彙の処理の方法に自分で気づくようになることを目標とした。

ところで、リストの単語には調べた際に複数の意味があって、文脈上どの意味で使用されているか分からないものも少なくなかった。学習者にとっては戸惑うことも多かったと思うが、単語の意味の広がりを知るだけでなく、複数の意味の中から文脈上の使用を特定する力を身に着ける良い機会になることを期待した。中級レベル以降、意味が複数ある単語に触れる機会は増すと考えられるので、単語リストの作業を続けているうちに、単語の傾向と記事分野を関連付けられるようになれば、この能力は正確に速く読む上で、役立つと思われた。

4-3　③「授業での語彙指導の工夫」

テーマに基づいて学期を通じて記事が配置され、その流れに沿う形で学習者は毎回予習で単語の読み方と意味を調べたり短文を作成したりして、授業に臨んだ。従って、授業に来た段階で学習者の語彙自体の理解・拡大・定着はある程度できているものと考えられる。ここでは担当者が①「テーマ設定」と②「単語リスト」の作業をどのように授業に関連付けて語彙指導を行ったかを報告する。

4-3-1　単語リストの意義の説明

単語リストの予習は授業で初見の記事を正確に速く読むための準備であることと、短文作成をすることで理解が進むことを授業内で説明した。ま

た、授業の 2 回目以降は、リスト配布の際に、それまでに読んだ記事と意味が似ている単語があることを指摘したり、単語群から次回の記事内容を予想することを促したりした。

4-3-2　個々の漢字の意味の把握からの語彙の拡大

漢字語彙の理解・拡大・定着には漢字が持つ高い生産性の利用が効果的だと考えた。新聞記事に使用される漢字数には限度があるが、語彙になるとその限りではなく、個々の語彙に対応するのでは効率的ではないため、漢字の生産性に着目することで効率化を図った。つまり、個々の漢字の意味が理解できていれば、新たな組み合わせの漢字語彙に接した際にある程度の類推・理解ができるだろう、そして、この類推力の向上が読解力の速度・正確さを向上させるのではないかと考えた。また、類推した意味が正しければそのまま新しい語彙が増えることになる。

生産性から語彙を拡大する指導に際し、漢字語彙の提出時に個々の漢字の意味を説明し、理解を確認した。その例としては、記事 2 回目の「提携」を分解し、「提」は手偏が示すように手を使う動作であり、「（宿題の）提出」という単語になると手で差し出す意味になると説明した。「携」は「携帯電話」でも使用される漢字で、手で持つという意味もあることを説明した。「提案」など既習の漢字との組み合わせも出した。こうした個々の漢字の意味の確認は、初級漢字についても時間が許す限り行った。また、可能であれば既習の漢字や語彙で意味が似ているものを提出した。

また、語彙を機能面から見ることも効率的な理解と拡大を促すと考え、その一つとして動詞の組み合わせに注目した。記事の流れでは 2 回目の記事で「扱う」の意味を説明し、3 回目の記事で「取り扱う」が登場した時に、V2 動詞としての「扱う」が V1 動詞の「取る」と組み合わされることによって複合動詞中でどのように使用されているかを説明した。その際に「取る」の意味も説明し、同じ記事中にその後「取り込む」が出てきた時には、「取

る」が「込む」と組み合わせられてどのような意味の複合動詞になっているかを説明した。また、7回目で「入り込む」が登場した時には、同じ「込む」という漢字が入っている複合動詞の意味が動詞の組み合わせでどう変わるかを説明した。

4-3-3　既習語彙からの拡大

既習語彙から語彙を拡大する指導方法は2015年度も行ったが、2016年度春学期は特に重点を置くことにした。例えば、動詞から名詞になった単語は元の動詞を言わせるなどした（例「扱い」→「扱う」）。また、生産性が高い組み合わせは学習者に思いつく単語を挙げさせたり（例「訪日する」→「訪米する」「訪中する」）、元の動詞に戻させたりした（例「訪日する→日本を訪問する」）。その際に助詞の確認が必要な場合には例文も挙げた。

また、「～化（する）」の形になっている単語は基本的な用法の確認後、単語が登場する度に、「～化」の前の名詞によって語彙がどのように広がるかを説明した。これは「数値化」「都市化」「商品化」などを取り上げた。

4-3-4　文脈の中で語彙を増やす

語彙の一部としての読み方は分からなくても、初級で学習したので見たことはあるという漢字が登場することが少なくなかった。これらの多くは個々の漢字の意味が分かるので、読み替え指導の対象ではあるが、意味の理解に文章の前後関係の把握を必要とすることがある。そのため、単に読み替え指導だけでなく文脈の中で理解をしていく指導も必要となった。「無人」や「商品化」などは背景によって異なる意味で使われていたため、基本的な意味の理解に基づいて文脈的な意味の理解に発展させる必要があった。ただ、多くは固定した使い方であるため、単語の成り立ちや文中での理解の方法を知れば、同様の場面でも一人で読むことが可能なものであった。

また、意味の側面から語彙を増やす試みとして、文脈の中で同様の意味で使用される語彙を意識させるようにした。例えば、「いっしょに」の意味での使用で見ていくと、1 回目の記事の「共同（研究）で」は、企業間であれば「提携する」（2・10・11 回目記事で登場）であり、「（A 社が B 社、C 社と）組む」（3 回目記事）と言うこともできると指摘した。また、家族であれば「一緒に（食事を取る）」（4 回目記事）が自然な語彙であることも指摘した。

4-3-5　定着を促す方法

ここまで授業での語彙の理解・拡大のための工夫を中心に報告したが、定着を促す方法としては繰り返し触れることを基本とした。その例を以下で述べる。

①同じ漢字が入っている語彙を学習者に口頭で挙げさせる。

②ワークシートには漢字の読み方を初見で書かせるタスクがあるが、そこに読み替え漢字を積極的に載せた。授業回数を重ねるうちに読み替えが増えていったが、紙面が許す限り載せるようにした。また、読み替えではないが以前の記事にあった単語が別の記事に再登場した場合は、何度でも載せて読み方を書かせた。

③ワークシートの語彙タスクとして、以前に読んだ記事から反対の意味の単語や似た意味の単語を探して書く設問を採り入れ、繰り返し触れるようにした。また、複合動詞「取る＋V2」の V2 に使われる漢字を思いつく限り書くといった複合動詞に関するタスクも採り入れた。これらは学習者自身が語彙の積み上がりを意識し始めた学期の後半から行った。

5.　統一テーマとしての「サービス」と漢字語彙の指導

2016 年度春学期において学期を通じたテーマである「サービス」と漢字語彙の指導をどのように関連付けたかを授業の 1 回目・2 回目の記事と、

語彙の定着が見えてきた学期末の 10 回目・11 回目を例に説明する。

5-1　1 回目記事　『日本で働く人の仕事　AI・ロボ代替可能 49%』

（字数 363 字）（2015 年 12 月 3 日　日本経済新聞・朝刊）

学期の共通テーマの基本となる概念と語彙を示すため、まず 1 回目に人工知能と日本人の働き方の関わりを問う共同研究の結果についての記事を扱った。ここでの「労働人口」や「労働生産性」などは既習の漢字の意味から理解できるものであるため、既にある知識を使って新たな知識をどのように処理するかというやり方を教師が具体的に説明した。ただし、1 回目の記事ではあるが上記の語彙は単語リストで予習させていた。字数は初回としてはやや多く 300 字を超えていたが、この回は以降の授業の全体像を提示する意味もあったので教師がリードする形で授業を進めたため、読解時間の確保には影響しなかった。この記事に出てきた「共同（研究）で」はその後の記事では「提携する」「組む」などに関連付けていった。

5-2　2 回目記事　『ペッパー　接客上手に』

（字数 274 字）（2016 年 3 月 14 日　讀賣新聞・朝刊）

この記事は文字数、具体性、語彙の関連性、中級文法の確認の点から見て、最もバランスが良いものであったため、6 章においてケーススタディーとして取り上げる。この回から授業内での学生自身の活動を本格化したため、字数は 260 字前後とした。「サービス」の記事で「手偏」の漢字が多く現れることに担当者が気づいた点でも、漢字の個々の意味を利用するという 2016 年度春学期の方向性に確信を感じた記事である。1 回目が概念的な内容であったのとは異なり、ここには具体的な会社名が現れ、「商品」や「サービス」が学習者にとってぐっと身近なものとなったようだった。

5-3　10 回目記事　『ネットで僧侶注文　波紋』

（字数 394 字）（2015 年 12 月 29 日　毎日新聞・朝刊）

見える商品としてのサービスの延長として、宗教という心の問題をどのようにサービスととらえるかを扱い、読解力の向上を観察することが狙いだった。ここに至るまでに「数値化する」「製品化する」などの「～化（する）」が数回登場したが、ここで扱う「商品化する」とは宗教行為である。それが体臭の「数値化」などの「～化（する）」とどのように異なるかを問うことで、語彙の理解力を見ることができた。

5-4　11 回目記事　『車大手　IT 配車と連携』

（字数 369 字）（2016 年 5 月 26 日　朝日新聞・朝刊）

学期最後の記事である 11 回目はそれまで出てきた語彙が多く扱われているもので、「ペッパー」「ネットで僧侶注文」に次いで 3 度目に「提携する」が登場した。1 回目の AI（人工知能）と働き方との関係が「自動運転の『無人タクシー』」の可能性として具体的に提示されていた。学期を通じて促してきた、テーマ性による読解力の向上を見る上で、授業の進め方が効果であったかを見ることができた記事であった。

6.　ケーススタディー　2 回目記事『ペッパー　接客上手に』

5-2 でも触れたように、2 回目の記事「ペッパー　接客上手に」は語彙の理解・拡大・定着に利用しやすい記事であったため、この記事を例に 2016 年春学期の語彙指導のやり方を説明する。以下が記事の全文である。

『ペッパー　接客上手に　マイクロソフトと提携』

ソフトバンクグループは米マイクロソフトと提携し、人型ロボット「ペッパー」の「接客力」を高める方針だ。小売店など企業向けのサービスで、今秋にも国内で提供する。

ペッパーが内蔵したカメラで来店客の性別や年齢を認識し、おすすめの商品を紹介したり、店頭での扱いがない商品でも、その場で注文できたりするサービスの導入を予定している。在庫の管理や売上高の分析にも活用できる。

訪日外国人のために、ペッパーが会話を通訳するサービスの導入も検討する。ペッパーをインターネットでマイクロソフトのクラウドサービスにつなぐことにより、こうした様々なサービスを提供できるという。

（字数 274 字）（2016 年 3 月 14 日　讀賣新聞・朝刊）

6-1　読解教材としての内容

記事で使用されている主な中級の文法項目は「（提携）し、」「（人）型」「（高）める」「という」で、それ以外の「～たり～たりする」「ために【目的】」などは初級文型であり、字数も 274 字と学期の 2 回目に読む記事としての難易度は高くなかった。店頭サービスを取り上げているので学習者にとって身近な内容で、企業名も学習者が日常触れることが多いものだった。

6-2　個々の漢字の意味からの類推

2 回目の記事であるため、初級漢字が組み合わされた単語でも初見の読解に必要であれば単語リストに載せて、読み方と意味を予習させた。授業では漢字の個々の意味から初見の単語の意味を類推するやり方を説明した。同記事には「内蔵する」（4 行目）と「在庫」（6 行目）が出てくるが、「内」は「国内」（同記事 3 行目に既出）と、「蔵」は語彙としてなじみのある〈冷蔵庫〉の「蔵」と読み方が同じで、「在」は中級で新出漢字として提出されることもある〈現在〉と同じ読み方である。〈冷蔵庫〉は飲食物などを低温で〈入れる〉箱・室であるので、個々の意味を併せると『ペッパーが内

蔵したカメラ』（4 行目）の部分から、『ペッパーの内にカメラが入っている』状態が読みとれる。更に、「在庫」の「在」の意味は〈いる・ある〉なので、「在庫」は店内、またはそれ以上の規模の〈室〉に商品があることを意味することが理解できる。

また、「導」（6 行目）の漢字は 1 回目の記事中で「導き出す」で出ていたが、2 回目では「導入」の形で登場するというように反対の意味の漢字と組み合わせられているため、個々の漢字の持つ意味から単語の意味の確認へと広げていった。

個々の漢字の意味の理解、定着のために部首の意味も利用した。この記事には「提携する」「提供する」「接客」「扱い」などの手偏の漢字が登場する。サービスは客に対して手を用いて供されるものであり、手を使う動作の単語には手偏の漢字が入っていることが多いことを指摘し、初見の漢字に手偏がついていれば手を使った動作をイメージして読み進めることもできると説明した。個々の漢字の基本的な意味を、「提」は手を使って相手に差し出したりすることで（例「宿題を提出する」）、「携」は手で持ったり（例「携帯電話」）手をつないだりすることだと説明した上で、文章中での「提携」の意味の確認を行った。仮に、「提携する」自体が初見であっても、個々の漢字の意味を知っていれば、ソフトバンクグループと米マイクロソフトが企業名なので 2 社が手を差し出し、つないですることと言えば、「共同で」事業を行うことであると理解できるだろう。

もちろん、漢字の意味は複数あることが多いので、単語となっている場合イメージと同じ意味であったか、あるいは別の意味があるかをその都度辞書で確認することが必要であると指導した。

6-3　単語の生産性の高さの利用

「訪日」のような単語は生産性の高さを利用した。「訪」を「米マイクロソフト」（1 行目）に国名として入っている「米」と組み合わせると「訪米」と

なる。「訪米する」で動詞として使用するというように語彙を広げた。国名を表す漢字は1回目の記事に「英オックスフォード大学」「米英」の単語の形でも登場している。外には11回目に「米大手」「独フォルクスワーゲン」などの形で登場した際にも、国名としての使用の確認を行った。

6-4　読み方の定着の工夫

漢字の読み方については、個々の単語の読み方から螺旋状に定着を図る工夫をした。記事に現れる順番に沿って単語を見ていくと、まず「接客力」（2行目）の次に出てくる「来店客」（4行目）とは〈店に来る客〉であり、「店頭」（5行目）でペッパーが接客する相手である。この携帯電話取扱店でのサービスにおいて「店頭」は〈店先〉と〈店内〉を併せた意味で使用されているため、ここで「店」が入った単語を新たに2つ提出できた。また、2行目の「小売店」の「売」の読み方を確認したり、「売」を6行目に出てくる「売上高」につなげたりすることもできた。

6-5　意味が似ている語彙への拡大

類似の意味を持つ語彙は文章中で説明するほうが分かりやすいので、記事の文脈を利用して「活用する」（7行目）と〈使用する・利用する・応用する〉の違いを説明した。ペッパーは基本的に店頭での接客に〈使用される〉ロボットだが、そこで得たデータを在庫の管理や売上高の分析に「活用する」こともできるという趣旨になっている。また、1回目記事にあった「共同（研究）」と同じ意味で使われている単語は、企業間であれば「提携する」であるというように使い分けの一例を示した。

7.　授業の運営と学習者の様子の関係について

上記において漢字語彙の理解・拡大・定着を目標とした授業の運営の意図と実際の授業運営について述べた。本章では2016年度春学期の試みが

学習者の語彙力向上にとってどのような意味があったかを学期を 3 期に分け、学習者の様子を中心に報告する。

7-1　1 期：記事 1 回目～ 4 回目

学期初めのこの時期には授業の進め方に慣れさせることも含め、基本的な理解に重点を置いた。語彙説明の時間の確保のために、記事の字数は 260 字前後とした。漢字語彙を構成している個々の漢字の意味の説明と確認を行い、初級提出漢字であっても時間が許す限り同様の作業をした。

この時期は意味の把握が中心だったので、ワークシートに読み方を書かせる際に学習者に対して、漢字語彙の中に一つでも知っている漢字があるか、または読み方は忘れていても意味は分かるかという確認の質問をした。また、初級漢字で構成される単語自体が初見のものであっても、意味の類推をさせた。例えば「食育」は意味を考えた後で教師から実際の意味を説明されることで、自分の類推と文脈上の使用との重なりやずれなどが確認できるようにした。

簡単な読み方・意味の語彙であっても文脈を必要とするものは、文中での意味を確認した上で、一般的な用法と応用例を示した。「過去最低」は「（過去）＋最高・最悪・最多」など生産性が高いのでぜひ定着させたいものの一つであったが、学習者にとっては前項の「過去」の捉え方が難しかったため、どのような文脈で使われるかを複数の例を挙げて説明した。

1 期目には同じ漢字が入っている語彙が複数回登場するようにした（例 2 回目「扱い」→3 回目「取り扱う」、2 回目「来店客」→3 回目「来店増加」）。漢字の読みは教師が中心に行い、学生にはまだ積極的に言うようには促さなかった。

単語リストの意義ついては次のように説明した。固有名詞や文脈上外せない難解語彙は事前に調べるほうが効率的である。また、中級の講読や文章表現でよく使う語彙は、読み方を調べるだけでなく文の中での使い方も

考えて自分で短文を作ると覚えやすくなると伝えた。

リストの作業を通じて、同じ初見の語彙でも固有名詞と文法的に捉えるべきものとの処理の違いが意識できるようになることを目指した。例えば、固有名詞であることを示す文法的な指標を指摘したり、地名や社名などの固有名詞が文章の理解に直接関係しなければある程度飛ばし読みもできることがあることを伝えたりした。

また、複合動詞の構成を意識させることで、漢字の組み合わせの生産性の高さと語彙拡大の関係を意識するように促した。1〜4 回目で「導き出す」「使い切る」などが登場した際に、「動詞（V）1」と「動詞（V）2」のそれぞれの意味の確認と複合動詞としての意味の説明を行い、初めてみる複合動詞の意味の捉え方を確認した。動詞そのものについては常に助詞との関係を指摘し、助詞が記事中で省略されている場合は授業では助詞も使った例文を提出した。

7-2　2 期：記事 5 回目〜 8 回目

授業の進め方に慣れ、漢字の個々の意味に意識が向かうようになった時期であるため、語彙の積み上げ、つまりどのぐらい拡大したかが課題となった。そのため、読み替えを学生に言わせたり、ワークシートでも繰り返し取り上げたりして、語彙が広がっていることを意識させるようにした（例「企業価値」→「株価」（5 回目『日清、株価連動の社食』））。また、広がりに際して文脈上、意味の違いが問題になる場合は違いを説明した（例「前月」と「先月」（5 回目『前掲』））。そして、定着についても少しずつ意識させるようにし、以前にワークシートやテストに出した漢字であっても新たな語彙の中に入っていたり、読み替えになっていたりすれば、何度でも登場させ、読み方の定着を図った。

語彙の生産性については、意味の側面から「酒＋離れる」→「酒離れ」（7 回目『小さな蔵元直送』）なども取り上げ、語彙の背景について説明した。

この形は 11 回目の記事（『車大手　IT 配車と連携』）中に「クルマ離れ」で登場した際に再度確認した。

中級で提出される語句の「～化（する）」について、この時期に基本的な意味を確認した。4 回目にも「『個包装』化」が登場していたが、この時期には「温暖化・観光化・数値化・製品化」など多く現れたため、文法上の説明に多くの時間をさいた。ここでの「製品化」（8 回目『体臭の数値化システム』）などの基本的な意味の確認は、10 回目（『ネットで僧侶注文　波紋』）の「商品化」への布石とした。

7-3　3 期：記事 9 回目～ 11 回目

この時期は語彙の拡大だけでなく定着にも同じぐらい焦点を当てた。語彙の拡大については既習漢字との組み合わせから意味が類推できるものが登場するようにした（例「クルマ離れ」「接近する」共に 11 回目『前掲』）。記事は既習の語彙が多く登場するものを選び、定着を確認しながら速読を目指した（例　10 回目・11 回目「提携する」）。

また、既習であっても基本的な意味ではなく、文脈に沿った読み取りをしなければならないものも出し、語彙の拡大と定着が最終的に読解力に結びつくようにした。例えば 9 回目の記事で行方不明の小学生が過ごしていたのは住む人のいない「無人の宿泊施設」であるが、11 回目の記事『前掲』の「無人タクシー」は 1 回目の記事で扱った働き方の将来に関わる文脈での使用である。

8.　授業方法の 3 つの柱の効果の報告

本論の 4 章において漢字語彙の理解・拡大・定着のために、授業運営において①「学期を通じたテーマの設定」②「単語リストの導入」③「授業での語彙指導の工夫」を 3 つの柱としたと述べた。ここではこの 3 つの柱が漢字語彙の理解・拡大・定着を促すに当たって効果があったかを検討したい。

8-1　①「テーマの設定」の効果

まず、一つ目の柱としてテーマを設定して記事分野に流れができたことで、語彙と文脈の関連性を学習者に意識させることができたと思われる。この関連性は②「単語リスト」の作業についても言えることなので、単語リスト作業が効果を出すためには、テーマの設定と連動させることが欠かせないと感じた。また、分野を絞ったことで、意味で関連させながら読み替え漢字を多く提出することができた。また、「共同で」「提携する」「組む」などの同じ意味の語彙を増やすことも可能となったのは全体にテーマの流れがあったからであった。

8-2　②「単語リスト」の効果

二つ目の柱である単語リストは記事の前渡しの代替の意味もあった。2015 年度秋学期には記事の予習を課したので、初見の記事中の語彙を学習者がどのように処理しているのか、また導入から時間が経過した後でどの程度覚えていたかを把握することが難しかったからである。このような点から考えると、もし 2016 年度春学期の学習者の初見での記事の読解力が授業が進むにつれて向上していっていたら、単語リストが語彙の理解・拡大・定着に効果があったと言えるかもしれない。ここではその想定に立って単語リストが語彙の理解・拡大・定着に貢献したかどうかを次の 2 点から検討してみたい。

8-2-1　初見での読解力の点からの検討

まず、授業の初めにワークシートに漢字の読み方を書かせた時、予習していながら読み方が書けないということはよくあったので、この作業自体からは予習が語彙の定着に与える効果ははっきりとは分からなかった。しかし、板書で読み方と意味を確認した後に記事を読ませた時には、前年度春・秋学期の学習者より正確に、速く読めていた。春と秋の学期とでは学

生の日本語能力に差があるが、通年単位であればある程度の比較が可能と思われる。記事は初見であるが、語彙は（1）予習、（2）ワークシートの作業、（3）作業後の教師による板書説明を経て 4 回目に触れるものであり、読解の段階では初めて見る単語ではなくなっていたためだと考えられる。正確に速く読むためには読み方だけでなく、意味も理解していることが欠かせないことを考えると、単語リストによる予習は漢字の読み方と意味の理解の向上に役立ったと思われる。

9～11 回目の記事では文字数が増えたが（11 回目 369 字）、読解の時間を増やさなければならないということにはならなかったことから、速度と正確さの点でも初見での読解力が向上したと考えられる。また、表面的な意味以外の文脈上の意味（例「宗教の商品化」10 回目記事『前掲』）についての質問にも適切に答えられていた。これは単語リストの作業を繰り返すことで文章の中での語彙のとらえ方が身についてきたからだと思われる。

学期を通じて、抽象的な語彙は事前の理解が必要であると感じた。また、こうした抽象的な語彙は意味を調べた上で、短文作成で使い方を自分で考えるという過程があったため、記事の中の具体的な例と結びつけた際に理解するのが速かった。

以上のことから単語リストの導入は語彙の理解・拡大・定着に貢献したと言ってもいいのではないと思われる。

8-2-2　単語の意味調べ・短文作成と語彙力向上の関連性

授業中の質疑応答以上に、単語リストの記述内容から学生の反応や変化などについて多くの情報を得ることができた。そして、単語リストの記述を時系列で追って見ると、単語リストの作業、すなわち単語の意味調べと短文作成が語彙力向上に関連があったことが見えてきた。例えば短文作成における変化は語彙の理解・拡大・定着の方法に学習者自らがどのように気づいていったかの過程を示していた。この変化は学期半ばごろから現れ

たので、リスト中の短文の特徴に変化が生まれた過程である学期初めから半ばにかけてどのように変化したかについて特徴①②に分けて説明する。その後で、単語リストの作業、つまり単語リストの意味調べと短文作成の作業が語彙の理解・拡大・定着にどのように効果があったかを検討したい。

8-2-2-1　短文作成の変化の特徴①

リストの単語はまだ見ていない記事中の単語の羅列であるため、学期初めには流れを意識せず個々の単語でばらばらの文脈の短文を作成していた。例えば、1 回目のリストには「労働人口」「労働生産性」などがあり、続いて「人工」と「知能」が載っているので、かけ離れた文脈で使用されていることは考えにくい。しかし、この時期には全員が個々の単語を用いたばらばらの文脈での短文を作成していて、自分で「人工知能」のように単語を組み合わせることはなかった。

しかし、学期半ば頃にはリストの全体から記事の大まかな分野を特定し、それを意識して短文を作成する学生が増えた。また、リスト中の単語を組み合わせたり、以前のリストにあった単語を使用したりしてリスト自体に一つの流れを作る者もいた。これは個々の漢字の意味から語彙を理解・拡大するという方法を、まだ見ていない記事の内容の推測に応用していたとも言えるのではないだろうか。学期半ばのこの時期には語彙の意味の理解の方法がある程度身につき、語彙数も拡大して、定着していただけでなく運用もできるようになったことが分かる。

8-2-2-2　短文作成の変化の特徴②

辞書で調べても意味が複数ある場合にはどの意味で文を作ればいいか迷うことは多いが、学期初めには意味の絞り込みに当たりリストの単語の並び方を手掛かりにして選択している様子は見られなかった。3 回目記事

（『小分け調味料・食品　続々』）のためのリストの「開拓する」は消費者の市場を開拓するという記事の中での使用だが、〈（荒れ地を）開拓する〉といった意味で短文を作る者がほとんどだった。学期半ばの頃には、こうした、記事全体で見れば唐突である意味の選択はかなり減り、短文の全体から浮き上がった文も見られなくなった。これは意味の絞り込みをする際に、前後の単語の並びの傾向も意識し、記事の文脈にまで視点が広がったからだと思われる。

このことは特徴①とは反対に、文脈の理解を語彙の意味の理解に利用していたからだと言えるのではないだろうか。

8-2-2-3　単語リストの作業の効果の検討

上記の特徴①②から、単語リストで意味を調べ、短文を作成するという作業の効果は語彙の理解から拡大、定着へという形でだけ生じていたのではなく、文脈の理解への発展、そして反対に文脈の理解を利用しての語彙理解という形でも生じていたことが分かった。

ところで、学期を通じてリストの作業を単純な意味調べと捉え、短文を最小限の長さで、時に辞書の文をそのまま書いていた学生は、文章の理解力、語彙力ともにあまり向上が見られなかった。一方、予習と初見の記事を連動させて捉えていた学生は複数の単語を組み合わせたり、助詞が多く用いられるような長い文を書いたりしていた。後者の学習者は授業内での反応もよく、学期の終わりの 9～11 回目頃には単語リストの語彙の並びから当日の記事の分野や内容をかなり正確に特定していた。中にはリストに記事内容を推定して書いて提出した者もいた。このようなことからも、語彙を理解して処理する方法に自ら気づき、処理能力が向上すると、記事全体の情報処理力の向上に結び付くという効果が期待できると思われる。つまり、単語リストの作業は漢字語彙の理解力を向上させることで、読解力を支える情報処理力も向上させる効果もあると言えるのではないだろうか。

8-3　③「授業での語彙指導の工夫」の効果

最後に授業運営の三つ目の柱について検討する。授業で繰り返し語彙の理解・拡大・定着を意図した活動を行った結果、学習者は徐々にその作業に慣れていったが、それが定着と結びついたことが感じられたのは 9 回目～最後の記事である 11 回目ごろだった。その効果として、以下の点が挙げられる。

①新出語彙を個々の漢字の意味から理解する作業が速く正確になった。例えば、11 回目記事『前掲』に「出資する」「合意する」が現れたが、それぞれ「資本＋出す」「意見＋合う」などに分解して考えられた。また、同記事内には「自動車大手」「新興企業」などの単語と複数の企業名が登場したが、それぞれの対応関係が素早く指摘できた。「大手」は新出語彙であるが、その後で「米大手」と出てきても理解が速かった。こうした語彙は個々の漢字の意味と記事分野が分かればそれほど難しいものではないため、学期を通じて処理方法に慣れることで理解が速くなったと思われる。

②生産性が高い語彙の語構成を理解し、文脈に沿って読解する力もついてきた。10 回目記事『前掲』で「宗教の商品化」の意味するところを確認した際の反応と、翌週のテストの解答内容から記事の意味が正しく捉えられていたことが分かった。「～化（する）」については、6 回目記事での「温暖化する」は語彙として定着度が高いため、基本的な語構成は 8 回目記事での「数値化する」「製品化する」で説明することになった。しかし、同記事では技術分野での使用のため語義そのものの意味で使用されており、読解力の向上に語彙の理解・拡大・定着が役立つことが確認できたのは 10 回目の「宗教の商品化」においてであった。

また、既出の単語についての反対の意味の単語、似た意味の単語などを探させるというワークシートのタスクからは、使用背景も意識しながら語彙が定着していたことが分かった。語彙の拡大については、複合動詞の後項を挙げさせるタスクからも、複合動詞の構成を理解した上で積み上がっ

ていることがうかがえた。

ワークシートの漢字の読み方のタスク部分には学習者自身によって、①読み方の訂正、②単語の分解、③教師が提出した反対の意味の単語などの新しい単語、④既習の語彙での置き換えなど様々な情報が書き込まれていた。特に②については学生のメモ書きから漢字語彙を個々の意味に分けたり、複合動詞を前項・後項の意味に分解して捉えていたりする様子が見て取れた。

9. おわりに―感想として

2016 年度春学期の語彙指導の試みを通じ、語彙の理解・拡大・定着には複数の活動が補完し合うことが効果的であるとの結論を得た。当該学期においては「テーマ設定」と「単語リスト」が連動したこと、そして「授業での語彙指導の工夫」が学習者にそれを気づかせたことがそのことに当たると感じた。また、理解・拡大・定着のためには繰り返し触れさせるという地道な作業が欠かせないと痛感した。語彙について言えば、この学期の学習者は復習テストを入れると同じ語彙に 5 回は触れたことになる。

2016 年度春学期は「労働人口の AI・ロボットでの代替可能性」から始まり、労働の一つとしてのサービスを柱に様々な日本社会の面に触れ、「自動運転による『無人タクシー』」の可能性で終わった。人工知能で代替される「無人」が単なる自動化を意味するのではないことを学習者が初見の記事から感じ取れたのであれば、語彙力の向上によって読解力の向上を図るという目標の一部でも達成したと言えるのではないだろうか。

謝辞

新聞講読科目の授業運営につきましては日本語•日本文化教育センターの村田年先生にご助言いただきました。心より御礼を申し上げます。

使用教科書

「中級日本語　上」（東京外国語大学　留学生日本語教育センター　編著）2015 年 3 月 30 日　新装改訂版　第 1 刷発行

参考文献

加藤奈津子（2016）「中級の読解授業―新聞講読科目の例を通じて―」『日本語と日本語教育』慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター 44 号、pp. 82–83